奈良県立大学「研究季報」第12巻 第3・4号（2002年2月8日）

ヒュームと人種主義思想

髙 田 紘 二

I

Richard H. Popkin は、ヒュームを人種主義思想の持ち主とする見解を明らかにしてきたが、この問題を論じたかれの論考の多くが一書にまとめられている。[1] 本稿では、かれのこの書を手がかりに、この問題について、すこし考えてみたいと思う。

一般的に言って、ヒュームは、啓蒙主義時代にあって、迷信と偏見にたいするもっとも厳しい批判家のひとりと目されており、しかも人間的にももっとも穏和で慈悲深い人物のひとりとも見なされている。それゆえに、ヒュームの人種主義思想にたいする影響という問題は、「一般に奇妙で不適切」(251) と思われている。ポップキンによれば、このことは、ある程度まで正しい。しかしながら、かれの人種問題にかんする意見・ことばは、18世紀後期と19世紀初期における、白人の優越性と黒人の劣等性を生得とするしかも治癒不可能な永遠性・永続性をもつものとして、擁護・正当化する議論のなかで、もっとも不幸な役割を演じたこともまた明白な歴史的事実である。このような認識にもとづいて、ポップキンは、つぎのような課題を設定する。すなわち、ヒュームの見解を18世紀における人種問題の理論化の文脈の中に位置づけること、そして、ヒュームが、この時代のもっとも有毒な人種主義思想の思考形式に理論的基礎を与えたこと、さらにまた、かれが、極端な人種主義者たちにとって好都合な権威となったこと、こうして、反対に、かれは、人道・博愛主義者たちの戦うべき中心人物であったこと、また、ヒュームがこの宿命・運命に本当に値するのかどうかについても考察されるであろう。(251)

II

ポップキンによれば、18世紀は、近代人種主義理論の分水嶺である。[2] 歴史的に見れば、コロンブスのアメリカ大陸への上陸すなわちヨーロッパから見たアメリカ発見からアフリカ人奴隷制の開始まで、ヨーロッパのキリスト教徒たち（新旧を問わず）は、次のことを証明・正当化しようと躍起になっていた。すなわち、アメリカのインディアンとアフリカの黒人たちが、自分たちよりも劣った人間であり、かれらが、文明的なヨーロッパ人たちによって受けている取り扱い（過酷で非人間的な）にふさわしく値するのだということにかんする適切で強力な理論を与えることによって、現在起こっていることから獲得している莫大な利益を正当化しようとしたのである。

ところで、この時代には、このような理論のほとんどは、依然として、人類は同じ父なるアダムの子孫であり、大洪水の７人の生き残りの子孫であるという、聖書の人間史像に基づく、理論とはいえないような理論から成り立っていた。それでは、このような同じ父から生まれた同じ人間が、いかにして今のような大きな違いを生み出したのだろうか？　これにたいする答えは、つぎのようになる。

ヨーロッパ人が文明化しインディアンとアフリカ人が野獣のようで野蛮なままであるのは、自然の要因あるいは神意・摂理的な要因の結果である。前者の要因としては、気候、自然的な要因による隔離・分離による孤立、環境要因による退化などがあげられる。後者の要因としては、聖書に記述されているように、

不信仰や神の冒瀆から生じる、神による妨害（たとえば、ハム語族やカナン人とかれらの子孫にたいする呪い）があげられる。これらの要因が、単独であるいはいろいろな要因が重なり合って、現在明白になっている人間のあいだの大きな違いを引き起こしたのである。(251-52)

ポップキンによれば、これにたいして、人間の単一ではない多元的創造説は、聖書の規定に反する異端的な説明ではあるが、現在の人間のあいだの越えることのできないように見える差違について、より満足のいく説明を与えてくれるように思える。このような人類誕生にかんする多元説は、16世紀初めにすでに存在しており、17世紀中頃には、異端の神学者アイザック・ラ・ペイレール[3]によって、「かれの時代で最大・最高の異端」[4] と見なされる聖書解釈として、古典的な定式化がなされていたが、17・8世紀には、いまだに、通常、一般にはまじめな考察に値するものとはまったく認められていなかった。(252)

しかし、大航海時代の到来や宗教改革の衝撃、ルネサンスの人間中心時代の登場などは、人間生活の隅々まで支配してその鉄壁の支配を誇っていたかに見えた、キリスト教支配に風穴をあけつつあった。こうして、ユダヤ－キリスト教的な人間史にたいする信仰についても、先駆者たちのあいだで浸食されはじめていた。それゆえに、17世紀の後期までには、聖書の異端的解釈と見なされる、人類の多元発生・起源説 Polygenesis についても、可能なありうる説明のひとつとして認知されるようになっていた。さらに、このようなキリスト教神学の急速な退位・廃位という事態は、大航海時代の幕開けから生じた、ヨーロッパ各国の激烈な植民地の獲得競争のなかで、植民地経営をイデオローギィ的・理論的に正当化する一環として、ヨーロッパの白人の優位性にかんする世俗的な“科学的”説明の必要を促した。

こうして、必然的に、啓蒙主義の時代には、人類の多様性の起源にかんする議論の数は、一部はおそらく社会諸科学にたいする広範なしかも一部には純粋な知的関心をふくむ、多くの興味の増大のゆえに、しかし、ポップキンによれば、より多くは、植民地帝国にたいする、ヨーロッパの社会的・政治的・経済的な支配とこれらの諸国を搾取するためにアフリカ人を利用することを正当化する必要のゆえに、飛躍的な量に達していた。

たとえば、モンテスキュウは、気候が人々の違いを導いたという、このような主要な理論のひとつを提出した。しかしながら、何世代にもわたる変化した地理的な移転の後も、アフリカと中央アメリカのヨーロッパ人が顕著に黒くならず、反対にまた、北アメリカとヨーロッパのアフリカ人が顕著に白くならないという明白な事実の示す、証拠が、さらに、続く、ビュッフォンの提出する、もっと複雑な環境論学説をもたらした。

ビュッフォンは、モンテスキュウによる気候の要因のみによる環境論にたいして、人々の差違を気候、栄養、生活様式に帰した。これらの要因は、ビュッフォンによれば、何世代にもわたって、人々の身体的・肉体的な特徴（顔立ちなど）に複合的な影響を与えた。さらに、ビュッフォンは、モンテスキュウと同じように、次のように主張した。すなわち、正常な人間の自然条件よりも人々を白くなくしたり、それゆえに、美しくなくしたり、文明的でなくしたりした退化の過程（たとえば、アフリカ人やインディアンに起こったような）は、その過程を逆転させられることができるであろう。もし人々がコーカサス山脈とパリとのあいだの帯状の地域に移住させられて、フランスの食物で養われ、フランスの教育を施されたならば、そのときには、かれらは、十世代で、すべて、白くなる（価値的に白が黒よりも高いことが前提されており、この白ということばには、美的であり知的であるということも含意されている）であろう、と述べている。

このように、何らかの要因によって、人々が本来の白さ（価値的に高い）から他の色（価値的に低い）へと変化する退化の過程に基づいて、人類の多様性を説明する、いろいろな退化説論者たちは、全体に、現在の状態（一定の原因をもつ過程によって生み出されたのであるから）は、何らかの種類の環境工学に

よって治癒できるであろうという望みを抱いていた。とはいえ、かれらのほとんどは、被白人たちが到達していた状態について、このような治癒が可能であるとは思えないような、かなり悲惨な描写を与えていたのだが。(253)

他方、ポップキンが、上述の「退化理論」よりも「もっと絶望的な種類の人種主義」[5] 思想と呼ぶ、多元的な前アダム説 polygenetic pre-Adamite theory は、非白人の劣等状態について、これを永久的・固定的だとする「正しい」説明として提出されていた。

たとえば、この説の初期の理論家である、ゴドウィン Morgan Godwyn は、かれの『黒人とインディアンの擁護 The Negro's and Indian's Advacate (1680)』という、きわめて象徴的な表題をもつ著書で、つぎのように断言している。すなわち、植民地主義の擁護者たちは、ハムの呪いによる説明（神の呪いによる退化・劣化）よりも、"前アダムの気まぐれ Pre-Adamitae whimsey" 説のほうを好んだと。というのは、その説のほうが、非白人の永遠の劣等性を説得的に証明しているとともに、当時評判を落としつつあった、聖書と宗教を浸食しており、表面的には、進歩と啓蒙の側に立っているかのような誤解を与えることもできたであろうからであった。[6]

ポップキンによれば、18世紀中頃のアジアからアメリカへのベーリング海峡横断の成功[7] は、人間の移動の可能性にかんする最初の堅固な説明を与えるとともに、人間の多元的な起源説明に訴えることなしに、新世界（ヨーロッパにとって）すなわちアメリカ大陸の先住民の人々のことを説明することを可能にした。ヒュームの同時代人であり、またライヴァルでもあった、ロバァトスン William Robertson は、かれの一元説を実証するために、これらのロシア特にシベリアを含む北東地域の探検によってもたらされた証拠を利用した。また、同時代にメキシコで出版された書（1763）の表題は、この一大陸から他の大陸への移動の容易な道の発見によって、これまで適切に解決できなかった困難な事実に頼っていた、前アダム人説の戯言を精算して、聖書にもとづいて、アメリカの住民の起源という大きな問題を解決できるとしている。[8]

Ⅲ

ポップキンによれば、人間の差違と有りうる起源とにかんする議論のこのような文脈のなかで、ヒュームは、エッセイ「国民性について Of National Characters」に付け加えた注のなかで、次のように、断定・断言した。

「わたしは、黒人と一般に他の人間種のすべて（4つか5つの異なる種が存在している）が生まれながらに白人より劣っていると思っている。白人以外に、どんな他の肌の色を持つ文明化された民族もまったく存在しなかったし、行動であれ思弁であれ、卓越した個人でさえもまったく存在しなかった。かれらのあいだには、どんな独創的な製品も、どんな芸術も、どんな科学も、決して存在しなかった。他方で、古代のゲルマン人や現在のタタール人のような、白人のうちでもっとも残酷で野蛮な人々でさえ、依然として、勇猛さ、統治形態、あるいは他の特別な何かにおいて、かれら［黒人と一般に他の人間種のすべて（4つか5つの異なる種が存在している)］よりも優れた何かをもっている。このような画一的で不変な相違は、もし自然がこれらの人間の種のあいだに始元的な区別をもうけなかったならば、これほど多くの国々と時代に生じることはできないであろう。われわれの植民地は言うに及ばず、ヨーロッパ中に黒人奴隷が散らばっているが、かれらの誰も、これまでどんな天才の兆候も全く発見されることはなかったのにたいして、かの無教育の下流の人々［白人のうちの］は、われわれのあいだで活動・働きを始めて、あらゆる職業で頭角を現すであろう。ジャマイカでは、確かに教養あるひとりの黒人について語られるが、しかし、これは、二、三語の言葉をはっきりとしゃべるオウムと同じように、かれが

ひじょうにわずかの業績を上げたとして賞賛されているのであろう。」[9] (253-4)

このようなヒュームの叙述のなかから、ポップキンは、ヒュームの立場が暗黙の多元的起源説と多様な人間の発展にかんする歴史的な証拠に基づいた推論とに基づいていることを探り出す。

こうして、ヒュームは、カントとこの時代のアメリカの何人かの人種主義者たちとに大きな衝撃と影響を与えることになった、かれの人種主義的な法則を引き出すことになる。ヒュームは、人類の起源について何を信じているかについて、はっきりとした言説を残さなかったが、かれは、道徳問題に経験的な論証方法を適用したとする、エッセイと歴史的な諸著作において、人類の単一な直線的な発展は存在せず、一定の政治的・社会的・知的な諸要因の結果として、野蛮から文明への発展を含む、多様な発展系列が存在するという、見解を与えている。さらにまた、ヒュームは、宇宙の永遠性について疑いをもっていたように見える。ヒュームによれば、世界と世界のすべてものは、「その幼年期、青年期、壮年期、および、老年期を」もっており、「そしてまた、あらゆる動物および植物と同様に、人間も、一切のこれらの変化の中にあるといえるでしょう。」[10]

このように見ると、人間の幼年期は、野蛮であり、人類の幼年期もまた、世界中で、この状態のなかにあったし、イングランドは、カエサルの侵入の時代には、野蛮であった。古代の中東は、モーゼが生きているときには、野蛮であった。アフリカ、アメリカ、アジアの広大な部分、および両極地帯は、いまだヒュームの時代にも野蛮な状態のままであるが、他方、ヨーロッパは、文明状態へ変わった。(254)

ところで、ヒュームによれば、この変化がいかにして起こったかを理解するためには、ひとは、歴史を研究しなければならない。歴史は、人の経験をすべての歴史と民族にまで拡大するのであり、歴史に精通するひとは、世界の始元から生きていたことになり、あらゆる世紀にわたる知識のストックに連続して加わることになるからである。[11]

ギリシャとローマの歴史家たちから獲得される古代世界にかんする、いろいろな事実と観察の記録や資料は、古代の野蛮な事態・形勢がいかにして現代ヨーロッパとくにイングランドにおける、より文明化された状態へ変化したのかを示すために利用され、ヒュームは、さらに分析を進めて、この変化を引き起こした諸要因を分離しようと試みた。ヒュームが探し求めていたのは、直線的あるいは年代記的な連続する発展ではなくて、代わりに、かれは、野蛮から文明への変化が如何にして生じたかあるいはこの変化が何故に生じなかったかを説明しようとし、これらの変化を引き起こした原因として、文化的・社会的・心理学的な諸要因を発見しようと努める。[12]

おもしろいことに、ヒュームは、これらの発展がどこであるいは何時始まったかに、とくに興味・関心をもたなかっただけではなくて、かれは、聖書に記録された歴史を現実に生起したことすなわち現実の歴史の説明として理解することは不適切だとして否認した。

ところで、ヒュームは、上述したものをふくめて、多くの歴史的な論述と著作を残しているが、ポップキンは、明示的には、かれが人類史・人間史の起源について沈黙を守ったとはいえ、これらのうちには、暗黙のうちに人類の多元起源・発生説的な観点がふくまれていることを指摘する。(256-57)

ヒュームは、「奇蹟について Of Miracles」と題するエッセイで、旧訳聖書における人間の歴史にかんする記述について述べている。[13] そこでは、モーゼ五書は、「単に人である著作家および歴史家の産物」と見なされるならば、野蛮で無知な人々の著作として記述される。したがって、モーゼ五書が与える、人間史の起源にかんする説明は、すべての民族によって公にされた、起源にかんする根拠のない神話・伝説と似ているのであり、ここで展開されている、他のどんな歴史的証拠も、その説明を確証しないし、われわれが知っている人間性のどのような世界や状態ともまったく根本的に異なっているのである。これらの

すべては、聖書における説明を、“理性ある”人間にとって完全に受け入れられなくしており、それだから、それは、歴史としてまじめに取り扱ってはいけないし、実際上、すべての経験に反する何かを信じさせるように読者のあいだに奇蹟が生じる場合にのみ真面目に取り扱われることができるであろう。[14]

ヒュームは、人間の歴史の始元・起源にかんする、聖書の説明を否認したとしても、何らのほかの説明をも提出しなかった。かれは、“信頼できる”書かれた記録が存在した時点で、文化の吟味を始めている。

したがって、かれは、たとえば、かれの主要な歴史作品『イングランド史』を、ブリテンへのカエサルの侵入をもって始めており、それ以前の事件にかんするすべての情報・知識は、“野蛮な諸民族”による記憶・追憶と口承の伝統からのみ構成されているのである。

こうして、人間史の起源にかんする全問題は、ヒュームによって、置き去りにされてしまったのであり、ヒュームは、聖書の説明を拒否し、他の説明も、神話・伝説や創作と見なしたのであり、ヒュームにとって、歴史家の仕事は、いろいろな文脈の中で人間性を吟味することであり、それが野蛮状態から文明化された状態へいかにして変化したかを人間の最初の野蛮な状態の起源を追求することなしに知ることであった。ここには、暗黙のうちに多元発生説的な観点が含まれているように見えると、ポップキンは結論している。(256-7)(未完)

注

(1) Richard H. Popkin, *The High Road to Pyrrhonism*, ed. by Richard A. Watson and Force, James E., Hackett 1993 (c1980). 本書に収められた22編の論考のうち、ヒュームを主な分析対象とする論考が、13編を占め、その他の論考についても、主にバァクレイ Bishop Berkley について論じた5編をふくめ、すべての論考において、直接間接に、ヒュームに言及されている。本稿では、本書への言及については、(24) というようにページ数を文中に示す。このようなヒューム像に対しては、当然にも賛否両論が生み出されている。

(2) この問題については、ポップキンは、つぎで詳しく論じている。Cf., The Philosophical Basis of Eighteenth-Century Racism, in : Harold E. Paligaro, ed., *Racism in the Eighteenth Century, Studies in Eighteenth-Century Culture, vol.3* (Cleveland and London : The Press of Case Western Reserve University, 1973), pp. 245-62. また、ポップキンには、同じような内容のつぎのものもある。Do., The Philosophical Bases of Modern Racism, in : Craig Walton and John P. Anton (eds.) *Philosophy and the Civilizing Arts : Essays in Honor of Herbert W. Schnider*, Athens (Ohio U. P.), 1974. これは、前掲書に再録されている。Cf., Popkin, *The High Road to Pyrrhonism*...pp.79-102. つぎのものも参照。拙稿「近代人種主義と17・18世紀思想」『研究季報(奈良県立商科大学)』第6巻第4号、23〜35ページ。

(3) Isaac la Peyere, *Prae-Adamitae*, Amsterdam 1655. この著書の英訳版、Men Before Adam は、1656年に発行されている。ラ・ペイレールについては、つぎのものがある。Popkin, *Issac la Peyrere (1596-1676) : His Life, Work and Influence*, Leiden (Brill), 1987. また、つぎのものも参照。拙稿「近代人種主義と17・18世紀思想(続)」『研究季報(奈良県立商科大学)』第7巻第4号、25〜34ページ。

(4) Popkin, The Philosophical Bases of Modern Racism, in : Popkin, *The High Road to Pyrrhonism*, p.92.

(5) *Ibid*, p.90.

(6) 啓蒙主義時代における、人類の単一起源説と多元的起源説については、つぎのものを参照。L. Poliakov, *Le Mythe aryenne*, Paris 1972. レオン・ポリアコフ『アーリア神話』アーリア主義研究会訳、法政大学出版局、1992年、174〜79ページ。また、前アダム人説については、簡単ではあるが、前出拙稿「近代人種主義と17・18世紀思想(続)」25〜29ページ参照。

(7) 周知のように、ベーリング海峡は、1648年に、デジネフ S. L. Dezhnev (1605?-72/3) によって発見され、1728

年に海峡を通過して、アジアとアメリカとが陸続きではないことを確認した、デンマーク生まれのロシアの航海家・探検家ベーリング Vitus Bering (1681-1741) にちなんで名付けられた。もちろん言うまでもなく、この発見以前にこの海峡を通っての人々の往来は頻繁に行われていたであろう。

(8) この書は、Father Francisco Xavier Alexo de Oririo という名の神父によってメキシコで出版された。その表題は長いもので、つぎのようである。"Solution to the Great Problem of the Population of the Americans, in Which on the Basis of the Holy Books There is Discovered an Easy Path for the Transmigration of Men from One Continent to the Other; and How There Could Pass to the New World, not Only Beasts of Service, but Also the Wild and Harmful Animals; and by This Occasion One Completely Settles the Ravings of the Pre-Admites, Which Relied on This Difficult Objection until Now Not Properly Solved", 1763. (253)

(9) David Hume, *The Philosophical Works*, ed., T. H. Green and T. H. Grose, Vol.3 (London, 1824), p.236nC.

(10) Of the Populousness of Ancient Nations, in : *Essays, Moral, Political and Literary*, ed., by Eugene F. Miller, from the 1889 edition by T. H. Green and T. H. Grose, Liberty Classics (Indianapolis), 1985, pp 377-464. (小松茂夫訳「古代人口論」『市民の国について』岩波文庫、上)

(11) Cf., Hume, Of the Study of History, *Works, Vol.4*, p.390.

(12) ポップキンによれば、「学芸と科学の興隆について The Rise of the Arts and Sciences」(小松茂夫訳『市民の国について』岩波文庫、下) や『宗教の自然史 *The Natural History of Religion*』(福鎌忠恕・斉藤繁雄訳、法政大学出版局、1972年) のようなエッセイは、この種の分析を提示している。

(13) Cf., *An Enquiry concerning Human Understanding*, ed. L. A. Selby-Bigge, 2nd ed. (Oxford : Clarendon Press, 1902), p.130.

(14) Cf., *The History of England...*, based on the Edition of 1778, Liberty Classics (Indianapolis), 1983, Vol.1, 1-2.